

Tommy
Emmanuel

「マジカルなサウンドが生まれる…」 & 夢の共演

Stephen
Bennett

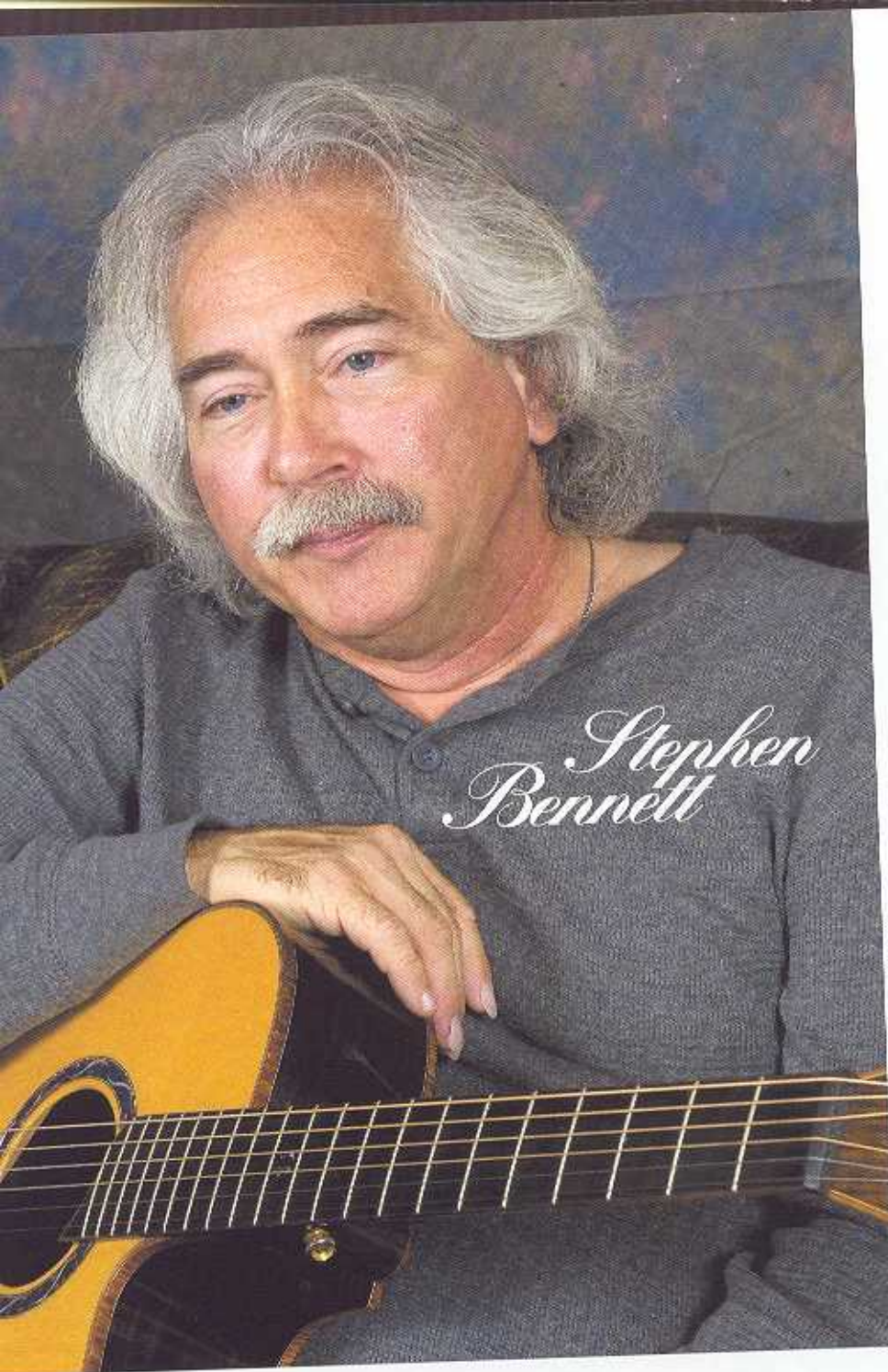
対 談

トミー・エマニュエル &
スティーブン・ベネット

取材：早川岳志
撮影：吉浜弘之
協力：ブルージー
アップ・ステージ

10年前、ナッシュビルのチェット・アトキンスのコンベンションでトミーとスティーブンが一緒にプレイするのを見て、アコギでもこんなすごいプレイができるのだと感銘を受けて以来、日本のギター・ファンの皆さんにも是非彼らのプレイを見ていただきたいとずっと願っていました。そして今年、ついにトミー・エマニュエルの日本ツアーの中で、アップ・ステージが企画する東京、札幌、横浜公演でスティーブンのゲスト出演が決まり、その夢の共演が実現することとなりました。二人の日本での初共演を記念して、本誌では東京公演の前夜、東京で二人の対談を

行いました。二人の出会い、お互いのプレイ、そして素晴らしいギターに囲まれてのギター談話など、盛りだくさんのインタビューとなりました。さらにDVD特別企画でスティーブンの「Cherry Blossom Time」の奏法講座、そしてインタビューの後に、トミーとスティーブンに特別にお願いして、スティーブンの「The Most Beautiful Sky」「The Water Is Wide」、そしてその場の雰囲気ですぐで演奏した「Eのブルース」の3曲をセッションした映像をDVDに収めることができました。コンサートにいけなかった方達も、彼らのマジカルなプレイをお楽しみください。



■日本へようこそ。ついにお二人揃っての来日
が実現しましたね。

Tommy：ステイブンはアメリカでもなかなか
逢えないから、日本までやって来たんだよ(笑)。

■トミーはここ4年間、毎年来日していますが、
ステイブンは3年ぶりぐらいですね。

Stephen：確か2004年に初来日をして、その後
に来たのが2006年だったと思うよ。

■お二人はどうやって出会ったのですか？

Tommy：ナッシュビルで行われているチェット・
アトキンスのコンベンションで出会ったのが最初
だね。

Stephen：あれは、私が初めて参加した年だか
ら…1997年だったね。

Tommy：私は2回目の参加だった。ステイブ
ンはホテルの中庭でハーブ・ギターを弾いてい
た。私はハーブ・ギターを見たのがその時が初
めてだったんだ。そしてすぐに友達になってし

まった。彼はその時に40人ぐらいの生徒がいて
ギターを教えているんだ、って言っていたけど、
私は、彼に教えることを少なくして、もっと積極
的にコンサートに出て活動するべきだと言っ
たんだよ。そして、彼は毎りのバスに乗る直前
に、バージニアに来てプレイしてくれないかと聞
いてきた。私は喜んで引き受けたよ。それからバ
ージニアに行くようになり、それがアメリカで演
奏活動を始めるきっかけとなったんだ。

■チェットのコンベンション、CAASでは毎年
一緒にプレイなさっていますし、その他でもジ
ョイント・コンサートを何回もやってらっしゃい
ますよね。

Tommy：ステイブンはオーストラリアも一緒
にツアーしたし、イタリア、ドイツ、フランスでも
一緒にプレイしたね。

Stephen：それからオランダ、イギリスにアメリ
カ…。

■一緒にプレイする時はどうやって曲を選んだ
り、アレンジするのですか？

Tommy：一番やりやすいのは、ステイブンが
既にアレンジした曲に、私がハーモニーなど新
たなパートを重ねていくという方法なんだ。それ
からフィドルの曲やアイルランドの曲のメドレーな
どは私が最初にリードを取り、それから彼がリ
ードを取り私がリズムにまわるといった感じかな。

Stephen：それからスイングの曲もソロの投げ
合いをするね。プレイしながらじっくりするもの
を探していくんだ。

■どんな曲をよくプレイなさりますか？

Stephen：ビートルズの曲はよくやるね。

Tommy：「Yesterday」「Something」はよくや
るね。

Stephen：私がハーブ・ギターで基礎を築き、
その上にトミーがハーモニーなどを乗せてくるん
だ。ハーブ・ギターは豊かなサウンドを持っている
ので、トミーは何の心配もせずに、その上に思
うがままのフレーズを乗せてくるんだ。

Tommy：たとえば、皆さんがよく知っている
「枯葉」という曲は、私はシンプルにメロディーを
弾くんだ。ステイブンがベースや伴奏などをす
べて引き受けしてくれるので、私はただメロディー
を大切にプレイするだけでいいんだ。ステイブ
ンがメロディーを弾き出すと、私はそれにハー
モニーを重ねてプレイするわけ。

Stephen：トミーほど相手のプレイをよく聴き、
パーフェクトなフレーズを重ねてくるプレイヤー
はいないね。

Tommy：相手のプレイに合わせて、彼らのプレ
イを引き立てるのが面白いんだ。今朝も一緒に

プレイしたけど、プレイすればするほど色々なものが聞こえてきて、自分のパートをさらにミュージカルなものに進化させていくことができるんだよ。

■最初から全て決まったアレンジではないんですね。

Stephen：半々だね。

Tommy：既に何度もプレイしていて完成しているアレンジもあるし、アドリブでやっているものも結構あるからね。

Stephen：前回逢ったのは7月で、その前は1年ぐらい逢っていなかった。だからそんなに一緒に練習する時間はないんだよ。今朝、新しい曲を1曲試したんだよ。それはビートルズの「Can't Buy Me Love」で、二人とも良く知っている曲だったから15分ぐらいで完成した。既に私はソロのアレンジをしていたから、それを少し変えてトミーがその上に新しいフレーズを重ねてきたんだ。

Tommy：二人とも作曲もするしアレンジもするからね。だから彼のプレイを聴けば自分のパートが見えてくるんだ。今朝も彼のプレイを聴いた時、彼と同じように弾いたらアレンジが忙しくなってしまうので、自分のパートはハーフタイムで考えたんだ。そうしたら二人のパートが上手くはまったよ。興味深いアレンジで、グループをキープすることを常に心がけているからね。

Stephen：「Can't Buy Me Love」のアレンジを弾けばトミーが気に入ってくれて、面白いアレンジができると最初から分かっていたからね。

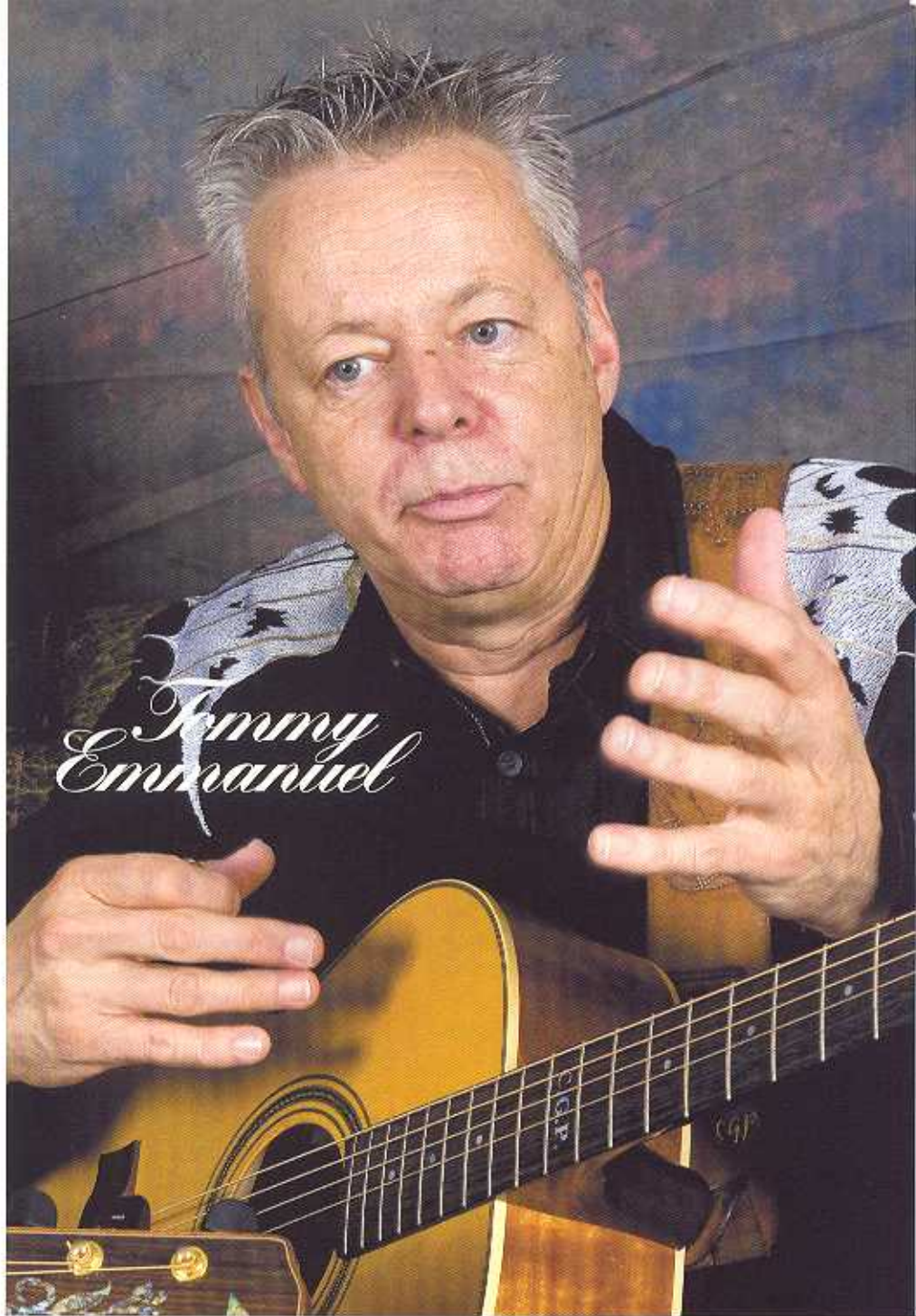
■お互いのプレイの魅力をお話いただけますか？

Tommy：スティーブンは私の大好きな作曲家の一人だからね。彼のメロディーは本当に美しく、また彼のアレンジは物凄く複雑なものなんだ。私たちのスタイルは全く違うし、彼は独特のスタイルを持っている。彼が新しいCDを出すと、必ずいつも心を惹かれる素晴らしい曲が入っているんだ。彼はブルーグラスやブルースのルーツも持っているけれど、彼の一番の魅力は、彼の作り出す美しいメロディーだね。

■彼の曲でお好きな曲は？

Tommy：「Issoudun」や「Lady Bird」が大好きだね。

Stephen：1997年にトミーのプレイを初めて聴いた時、私は部屋に戻って横にならなければならぬほどのショックを受けたんだ。というのは、彼のステージはアコースティック・ギターで私がまさに求めていたものだったので、本当にノックアウトされてしまった。そしてホテルのバル



コニーから下を見て、コンクリートの上に飛び降りようか、芝生の上に飛び降りようか真剣に考えた(笑)。ギタリストだったら、誰もがトミーのプレイを初めてみたときに、同じような経験をしているはずだよ。そして、私はトミーをコピーすることは意味がないことだと考えたんだ。彼は最高のプレイヤーだから、彼のスタイルをコピーしても、彼にかなうわけがないからね。だから彼をインスピレーションとしたんだ。もちろん彼

のミュージックもインスピレーションだけど、それよりも、常に自分のベストを尽くすという彼の姿勢に魅かれてしまった。そして私はとても暗れ晴れとした気持ちでナッシュビルを離れたんだ。彼と一緒にプレイするのは本当に楽しいからね。彼とは本当に良い友達になったし、いつも楽しい時間が過ごせるし、二人は仮通った感性を持ち合わせていると思うよ。

Tommy：一緒にプレイすると本当にマジカル

Tommy Emmanuel & Stephen Bennett



彼女の
素晴ら
愛用し
の私の
る。1
イ、こ
下のカ
Tommy
のギタ
Steph
も良く
スをフ
ターを
を使
をいて
Tommy
ープ
Steph
一の
晴ら
Tommy
一を
ップ
Steph
場の
って
Tommy
るん
うよ
るサ
■
Ste
感か
臓器
活量
かっ
つ
一の
成
の
な

になる。特にスティーブがハーブ・ギターを弾くと違った波長なので、それに合わせるのが本当に面白いんだよ。「Yesterday」を弾く時など、こうやってハーモニーを合わせると、様々な波長が飛び交って混ざって、本当に美しいサウンドとなるんだ。

Stephen: トミーはハーブ・ギターが引き立つようプレイしてくれるから、マジカルなサウンドが生まれるんだよ。

Tommy: スティーブの曲作りは私とは全く違って、とても複雑だからね。2回の転調や3つの異なったブリッジがあるなんて想像もつかないときもある。でも、私の好きなスティーブの曲はシンプルなメロディーにある。メロディーが一番大切だと感じているよ。そして、メロディーにコードを重ねた時にパワフルなミュージックになるんだ。「Ruby's Eyes」という曲を作ったとき、メロディーにこうやってコードを重ねていたら、突然パワフルなミュージックになった。だからメロディーにマッチするコードを付けることはとても重要なことだと思うよ。

■ここブルーザーにはお二人とも来日のたびに寄られています。素晴らしいヴィンテージや珍しいルシアーのギターが250本余り並んでいます。お二人とも今まで数多くのギターを弾かれてきたと思いますが、特に印象深かったギターや忘れられないギターはどんなギターですか？

Tommy: マール・トラヴィスのビグズビー・ネックが付いたあの有名なD-28は忘れられないギターだね。アクションもサイズで深く弾きやすかった。歴史の重みを感じたね。それからチャェットのカントリー・ジェントルマンも思い出深いギターだね。彼の晩年には何度も頼まれて弦をかえたことがあるんだ。オレンジのギターで、マーク・ノッブラーと作ったアルバムのカバーで持っている美しいギターだよ。今日もブルーザーで素晴らしいギターを試奏できた。この1983年D-45Sはパワフルで素晴らしいサウンドだね。ベスト・ギターはどんなギターかとよく聞かれるけど、それは弾くのが止められないギターだよ。

■色々なルシアーのギターもお持ちですね。

Tommy: 亡くなったトム・ウィリアムソンの美しいギターを持っているけど、ヴィンテージのマーティンみたいなギターだよ。それから新しいポール・リード・スミスのアコースティック・ギターも気に入っているし、12フレットでカッタウェイの美しいラリヴィーも持っているんだ。ヘッドに天使のインレイが入っているギターだよ。チャェットとカフェ・ミラノでプレイした時に、ジーン・ラリヴィーが見に来ていたんだ。コンサートの後で色々話している時に、彼は私がどこに泊まっているのか聞いて来たんだ。私はチャェットの家泊まっていると答えたら、翌朝にそのラリヴィーのギターが届けられたんだ。「このギターはあ

なたへのプレゼントです。No Strings Attached! 何も下心はありません」というメッセージが付いていた。それからブーメランのインレイが入ったメリルのウッドブリッジは、「エンドレス・ロード」のレコーディングで使った。もちろんメイトンのギターはツアーで使っているよ。

Stephen: 私はもちろんこのハーブ・ギターだね。ひいお祖父さんの使っていたダイヤアーのハーブ・ギターを手に入れてからこの20年間、ハーブ・ギターは私のミュージックの重要なパートナーになっているんだ。このギターは1909年に作られたもので、今年でちょうど100歳になる。素晴らしい楽器だよ。それからもう1台ダイヤアーのハーブ・ギターを持っている。トップが割れていたりしてコンディションが最悪だったけど、ジム・メリルのところで8年かけて作りなおしてくれた。先週やっと戻って来たけど素晴らしいギターになっていた。

■7月にメリルの工房に取材に行った時に見ましたよ。オリジナル・ヴィンテージの様に見事に蘇りましたね。

Stephen: 今日ここでプレイした1942年マーティン000-42は凄いギターだね。新しいルシアーではボジョアーで以前使っていたジョン・スロバットの作るギターが良かった。それからキャシー・ウィンガートのギターもいいね。私は彼女の作ったハーブ・ギターも持っているんだ。それと、

彼女のバロトン・ギターも弾いたことがあるけど
素晴らしい。メリルのウッドブリッジも長年
愛用していたけど、今はここ6年ほどはモーリス
の私のシグネチャー・モデルをメインに使っている。
1本目はマホガニーでシャープなカックウエイ、
このギターは2本目でローズウッドでラウン
ドのカックウエイのものだよ。

Tommy: マホガニーのモーリスは豊かなトーン
のギターだね。

Stephen: あのギターはCDのレコーディングでも
良く使った。ここ6年はツアーでは常にモーリス
をプレイしていて、ここ3年はこの2本目のギ
ターを使っているんだ。トミーがいつもメイ
トンを使っているように、私はモーリスが気に入
っていて、いつもモーリスを使っているんだよ。

Tommy: でも、どのギターを弾いても、ステ
イブンは常に自分のサウンドを持っているね。

Stephen: それはトミーも同じだね。今はギ
ターのゴールデンエイジだから、本当に沢山の素
晴らしいギターがあるね。

Tommy: ジーン・ラリヴィーが「素晴らしいギ
ターを作るのは簡単だけど、ギターに合うピック
アップを探すのはほぼ不可能」と言っていた(笑)。

Stephen: 仮にピックアップが見つかるけど、会
場のPAシステムによってまた違うサウンドにな
ってしまうからね。

Tommy: だから私はこのメイトンを愛用してい
るんだ。このピックアップ以上のものはないと思
うよ。どんなシステムに繋いでも、常に私の求め
るサウンドが得られるからね。

■最近の活動を教えてください。

Stephen: 2007年に長年患っていた腎臓の状
態が悪化して、昨年3月に腎臓を取り、5月に腎
臓移植の手術を行った。だから昨年は余り演奏
活動ができなかったんだ。手術が上手くいかな
かった時のことを考え、手術前にスタジオに入
って、それまでに作っていた新しいハープ・ギ
ターの曲をレコーディングしたんだ。幸い手術は大
成功で、今では健康状態も良好だよ。今年はこの
ひいお祖父さんのハープ・ギターが100歳に
なったのを記念して、「Good Wood」というハー

プ・ギターのCDをリリースしたんだ。1960年以
前の古い曲をアレンジしてレコーディングしたも
のだけど、オリジナルが1曲だけ入っている。そ
れから、このCDには1885年生まれのおひいお祖
父さんがプレイしている音源も入っているんだ。
彼がひとりで弾いているトラックが一つ、詩を朗
読しているトラックが一つ、それから彼が弾きは
じめ、音源が悪い真ん中のパートを私が入れな
おして、また彼のプレイで終わるというトラック
もあるんだ。私はパーシャル・カボを使って6弦
を開放にしてプレイすることがあるけど、なん
と彼も1960年初め頃に全く同じことをやってい
たんだって。鳥肌がたつほどびっくりしたね。

Tommy: 驚きだね、まさに遺伝だ。

Stephen: 私がパーシャル・カボを始めたとき
には、もちろんそんなことはまったく知らなかつ
た。このアルバムを作るにあたって、彼のレコー
ディングを聴いて初めて分かったんだ。それから
ナッシュビルのワイルド・ホース・サロンで行われ
たJust Plain Folks Awardで、私の「Reflection」
というアルバムがベスト・ソロ・ギターのアル
バムに選ばれたんだ。光栄に思っているよ。手術
のあと1年ほどはほとんど曲を作っていなかつ
たので、これからまた作曲を始めるつもりだよ。

Tommy: 新しい曲を作ったので、今年の初め
にスタジオに入ってCD1枚分をレコーディング
したんだ。でも7月に聴きなおしたら納得いくも
のではなかったの、また全てをレコーディング
しなおした。これは来年に「Little by Little」と
いうアルバムとして出すんだ。これをスワヒリ語
で「ハバナハバ」というんだよ。「ハバナハバ」と
いうインストの曲を作ったけど、バム・ローズが
詞を付けてくれたのでコーラスを歌ったんだ。こ
のアルバムはほとんどがインストだけど、ボー
カルも2曲入っている。それからジョン・ノールズと
のデュエットが2曲、ドイル・ダイクスとのデュ
エットが1曲入っている。ドイルとはキャロル・キ
ングの「タベストーリー」を一緒にやったんだ。3回
ほど転調する美しいアレンジだよ。それから「ム
ーン・リバー」のアレンジはリック・ブライスがボ
ーカルをやってくれた。チキン・ピッキングの新

しい曲で、ギャレス・ピアソンの為に書いた「ウ
ェルシュ・トーン」だね。彼は竜巻みたいだから
ね。そしてトラヴィス・スタイルの曲が2曲。ここ
3~4枚のCDでは必ずトラヴィス、チュート、ジ
ェリー・リードのスタイルの曲で、さらにステ
イブイ・ワンダーやジェームス・テイラーなどの影
響が感じられる様な曲を作って入れているんだ。
ここ1年ほどはエルトン・ジョンの曲を良く聴い
ていて、「Songs from the West Coast」は特に
大好きなアルバムだよ。ソングライティング、ア
レンジ、プロダクションと全てにおいてマスタ
ピースだね。それからエリック・クラプトンも常に
進化していて、彼からも大きな影響を受けてい
るんだ。そうそう、ディズニーの音楽で知られて
いるシャーマン兄弟の曲を、ソリッド・エア・レ
コードのために1曲レコーディングした。「くまの
プーさん」のソロ・アレンジだよ。それと…ジャン
ゴ・スタイルのアルバムをフランク・ヴィニョーラ
とレコーディングしたんだ。ここでは1934年のギ
ブソン・カラマズーをメインに使ったんだ。素晴
らしいサウンドのギターだよ。

Stephen: トミーも私もキム・パーソンという素
晴らしいエンジニアに、レコーディングをお願い
しているんだ。

Tommy: 彼女はアコースティック・ギターのレ
コーディングに長けていて、私たちが何を求めてい
るのかを熟知している人だよ。

Stephen: 私は1987年からずうっと彼女にレ
コーディングを任せている。

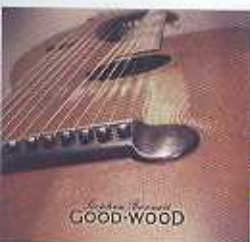
■最後に日本のファンの方々に一言お願いします。

Stephen: また日本に来ることができて嬉しい
です。

Tommy: 二人とも日本が大好きだからね。皆
が私たちの来日を心から喜んでくれて、いつも
暖かく迎えてくれるのが伝わってきます。

Stephen: それから二人とも沢山のインスピ
レーションを日本で受けているからね。

■二人揃って来日されて本当に嬉しいです。沢
山の日本のファンの方々が二人のマジカル
なプレイを楽しめることを願っています。



1983年製D-45Sを弾くトミー。

1942年製000-42を弾くステイブン。

Tommy Emmanuel & Stephen Bennett